

チェルノブイリ通信

<http://www.cher9.to/tusin.html>

NPO法人
チェルノブイリ医療支援ネットワーク
〒811-3102 福岡県古賀市駅東2-6-26-203
TEL/FAX: 092-944-3841
E-mail: jimu@cher9.to



チェルノブイリ医療支援ネットワーク(CMN)は、チェルノブイリ原発事故で被災した人々のために、現地から求められる医療支援を行います。この活動を通して、日本とベラルーシの人びとの心と心のつながりを深めます。

No.
100

原発事故がもたらした不安や孤独に向き合うこと

CONTENTS

リュドミラ・ウクラインカさんの体験記 / アルツール医師が来日 / 理事長交代のごあいさつ / 連続学習会のご案内 / 支援者のお名前とメッセージ / 事務局からのおしらせ / 編集後記



ゴミリからミンスクへと向かう列車の中で出会った男の子

あなたもチェルノブイリを支える一人になっていただけませんか？
ご寄付を受け付けています。

郵便振替口座 01770-1-65328
楽天銀行 ジャス支店（支店番号201）（普）7017104
住信SBIネット銀行 法人第一支店（支店番号106）（普）1030416



本紙はCMNの活動を支援してくださっている皆さまへお届けしています。また団体ウェブサイトでもPDFファイルにてご覧いただけます。送付がご不要な場合は事務局までご連絡ください。

リュドミラ・ウクラインカさんの体験記

～原発事故がもたらした不安や孤独に向き合うこと～



PLOFILE / Ludmila Ukrainka(リュドミラ・ウクラインカ、愛称はリュエグ)

ベラルーシ共和国で生まれ育つ。15歳のときに甲状腺の摘出手術を受ける。術後は声帯を傷つけられたため半年間声が出ない状態が続いた。また医師に対する不信や将来への不安など心身に大きな傷を負った。こうした自身の辛い経験を、同じ境遇にある人たちのために役立てたいと考え、臨床心理士を目指す。二度の来日経験あり。2005年には出産を経験。現在は愛娘のアンナちゃんと暮らす。

過 去にこの会報でも幾度かご紹介してきましたので、すでにご存じの方も多いかと思

います。ベラルーシ共和国のミンスク教育大学で教鞭をとるリュドミラ・ウクラインカさんは、心理カウンセラーで一女の母。チェルノブイリ原発事故後に甲状腺を患い、手術を受けられました。その後、自身の体験を生かしたいとの思いから心理学の道に進み、私たちのベラルーシでの活動にも長年協力いただいています。今号ではあらためてリュドミラさんの体験談や彼女の思いをご紹介します。

放射能に怯える声を耳にしても、どうやってその脅威に対処すればいいのかわからなかった

1986年4月。チェルノブイリ原発事故が起きたとき、私は10歳でした。

その当時、私はベラルーシの首都ミンスクに住んでいました。父はすでに軍務についていませんでしたが、化学部隊にいた経験から急きよ軍隊に召集されました。それから2週間、父は家に帰ってきませんでした。帰ってきたとき、父は軍服のままでした。それ以外、何も特別なことはありませんでした。

私たちは毎年モギリョフ州に住む祖母のところへ行っていました。原発事故のあったこの年も、ジャガイ

モの種を蒔きにモギリョフへ行きました。

それからしばらく経って、私たちの健康を蝕む放射能のことが噂され始めました。人々の不安に満ちた振る舞いを目にするようにもなりました。ですが汚染地域にいるにも関わらず、放射能は目に見えず、臭いもせず、全く何も感じない。それはとても奇妙なことでした。家族の誰も放射能対策はとりませんでした。ただ母の姉だけは、モギリョフの汚染地域からミンスクへ移住しました。

リュドミラさんの体験記は、活動報告集「チェルノブイリの群像」（改訂版）にも掲載しています。団体ウェブサイトにて閲覧可能です。

http://www.cher9.to/images/Cherno_gunzo.pdf

5年後、母は私を甲状腺の検査に連れて行きました。そして翌1992年、15歳のときに甲状腺の摘出手術を受けることになりました。当時のベラルーシでは、人々は放射能による健康被害について話すことに閉鎖的でした。がん患者とコンタクトを取ることに対して一般の人々が不安を抱くことも稀ではありませんでした。また医師による診察も非常に大雑把なものでした。

私はベラルーシで小児甲状腺疾患が増え始めた最初の時期の、数少ない患者の一人になりました。鏡を見ると、^{けいぶ}頸部には私を強く悩ま

せ、思春期の喜びを制限させた大きな手術痕がありました。この手術の経験は、深い傷痕として私の意識に組み込まれました。自分の将来に対し、5年先のことさえ想像できませんでした。それに結婚することも怖かった。なぜなら、どのみち私はもうすぐ死んでしまうだろうし、なぜ相手の人生まで壊さなくてはならないのかと思ったからです。

しばらくの間、ただただ悲しい毎日が続きました。両親も周囲の人たちも、誰も私の悲しみを和らげることはできなかったのです。胸に抱えた悲



ゴメリ州に次ぐ汚染地として知られるモギリョフ州。同州内の汚染地域に暮らす住民の数は約18万人だとされる

しみや怒り、不安といった感情をどこへもぶつけることができず、ときには自分自身を呪うこともありました。将来への不安を含め、PTSD(心的外傷後ストレス障害)としての数々の徴候があったのです。

私の人生に降り注いだ死の恐怖や不安な日々・・・ その体験を、同じ境遇にいる人たちのために生かしたい

自分の体験を通して病気や死、生の意味を考えるなかで、私はひとつの答えを見つけました。それは、生命とは無条件に尊いものであるということです。そして気づいたのです。私は生きている、それが最も大切なことなんだということに。

に対処する臨床心理学の勉強をしました。これは当時のベラルーシでは斬新的なものでした。大学での教育プログラムには、グループ・トレーニング、個別コンサルティング等、心理学専門家のサポートがありました。

過去をふり返ると、私は長期にわたってPTSDを患っていたのだと知りました。また授業以外に自分の希望で、^{しゅよう}悪性腫瘍患者のリハビリ・センターでも心理学実習を履修しました。そして大学院における修士論文のテーマには、「悪性腫瘍疾患患者のPTSD」を取り上げました。

1993年～1998年、大学でPTSD

こうしたサポートがなかった自身の



PTSDとは？ 強烈なショック体験、強い精神的ストレスが心のダメージとなって、時間がたってからもその経験に対して強い恐怖を感じるもの。災害や事故、暴力や犯罪被害などが原因になるといわれている。(厚生労働省サイト参照)

チェルノブイリ原発事故から長い年月を経たベラルーシ 汚染された地域で暮らす人々は、今なお心身に深いダメージを負っている



プレスト州ストーリン地区で行われていた甲状腺検診にてカウンセリングを行うリユドミラさん(左)

チェルノブイリ原発事故後のベラルーシでは、様々な心理学的影響(右下表参照)が見られます。ベラルーシにおける精神疾患登録数は291,000人(人口10万人あたり3705.28人)に上ります。精神障害による労働能力喪失の増加も認められます。例えば2013年の9ヶ月間は、前年と比較すると10%の増加です。また成人より小児のほうが精神疾患罹患率が高いです。2013年における成人人口の罹患率は、10万人あたり710.5人ですが、小児人口の罹患率は、990.0人です。

世界保健機関(WHO)の報告によれば、ベラルーシにおける自殺者数は2009年では世界で第2位を占

めています。これは、ベラルーシの住民の抑うつ状態のレベルが高いことを示しています。こうしたデータは登録、記録せねばなりません。しかしベラルーシでは、実際の統計は隠されています。またこうした状況を

引き起こした原発が、今ベラルーシに建設進行中であることを心配しています。

2005年、国際原子力機関(IAEA)とWHOは、放射能、核の非常事態時における心理・精神的サポートを含めた医療に対する詳細な

報告をまとめました。そしてこの報告は、非常事態における心理的健康管理の一般的根本方針として位置づけられました。これを受けベラルーシでは、放射能事故、放射能を使用したテロ攻撃で被害者になった場合における心理的健康を守る国のシステム作りが始められました。こうした国家的なサポートとともに、被災住民一人一人が放射能、社会的心理学の基礎的知識を身につけ、自分たちの力で問題を解決していこうとする姿勢が大事だと私は考えます。

<原発事故後、ベラルーシで確認されている心理学的影響>

- * PTSDと、将来に対する心気症^(※1)の固定化による自殺、がん、子どもの先天性奇形など
- * パニック的反応 * 慢性的な精神障害 * 自殺
- * 放射能恐怖症 * アルコール依存症^(※2) * 薬物依存症
- * 放射能に直接起因しない精神的・身体的障害^(※3)

※1)自身の心身状態に対して過度に悲観的に捉え、その結果、身体・精神・日常生活に支障をきたしてしまう精神疾患のひとつ

※2)ベラルーシは一人当たりのアルコール消費量が多い国。恒常的に600万人がお酒飲みという実態がある

※3)その多くは放射能を過大評価することによる



本稿は、日本衛生学会学術総会・シンポジウム「原発事故被災地域における精神的影響とリスク管理」にてリユドミラさんの原稿をもとに木村真三先生が発表された内容をアレンジして作成しました。



プレスト州立内分泌診療所・所長

アルツール医師が来日

～日本衛生学会学術総会にて講演～

2015年3月下旬、和歌山市で第85回日本衛生学会学術総会が開催されました。この総会で木村眞三先生（獨協医科大学国際疫学研究室、専門は放射線衛生学。CMNでは2年前から福岡での講演会などでお世話になっています）が座長を務められたシンポジウムに、プレスト州立内分泌診療所のアルツール・グリゴロビッチ所長が招待され、来日されました。シンポジウムでのアルツール所長の講演のようすなどをレポートします。

（なお心理カウンセラーのリュドミラ・ウクラインカさんもこのシンポジウムに登壇される予定でした。しかし体調不良のため、今回リュドミラさんは残念ながら来日ならず）

報告／河上雅夫（CMN理事）

日本衛生学会学術総会の会場近くにある和歌山城では、桜が開花して間もないころでした。枝垂桜など一部にはかなり咲き揃った木もあり、アルツール所長は講演前に散歩を楽しんだようです。

さて学術総会は3月26日から28日までの開催でしたが、アルツール所長が講演されるシンポジウム「原発事故被災地域における精神的影響とリスク管理」は27日でしたので、私はこのシンポジウムだけに出席して講演を聞いてきました。シンポジウムでは、まず獨協医科大学国際疫学研究室福島分室の小正裕佳子先生より、福島第一原発事故による影響について、福島の住民に対してのアンケート調査結果が発表さ

れました。

アルツール所長はプレスト州での甲状腺検査について報告。ベラルーシ共和国及びプレスト州での甲状腺がん患者数の変化を示しながら、これまでの検査について説明されました。彼が特に強調していたのは、触診の重要性です。ベラルーシで小児甲状腺がんが増え始めた1990年代当初はまだ超音波検査装置（エコー）がなく、指で首のまわりを触ることによってがんを発見していたのです。そのために、まず多くの医者が触診の技術をマスターしていきました。その後にエコー装置が導入されていき、診断が的確になされるようになったのです。

内分泌科（甲状腺・糖尿病）の専門医であるアルツール医師は、国際赤十字連盟による移動検診プロジェクトのスタッフとしてプレスト州で年間15,000人の甲状腺がん検診を実施してきた。CMNによる甲状腺がん検診プロジェクトには開始当初から参加し、ベラルーシ国内でもトップレベルの技術を身に付けた。



ベラルーシにおける小児期、青年期、成人期ごとの甲状腺がん発症数の推移グラフについて説明する木村先生

すことが重要だと考えます。また来日予定だったリュドミラ・ウクラインカさんの報告については、送られてきた原稿を元に木村真三先生が発表されました(※内容は2~4ページに記載しています)。

シンポジウムの前には、木村先生より東京大学教授の神馬征峰先生を紹介していただ

支援についての素晴らしい見識・経験をお持ちの方です。木村先生から10月に予定しているベラルーシ訪問について紹介されると強い関心を寄せられ、同行される可能性が大きくなっています。このように、色々なつながりから支援の輪が広がっていくことを実感させられた和歌山訪問でした。

アルツール所長によると、がんは触ってみれば確実にわかるということです。このような経験を福島に生か

きました。神馬先生はパレスチナ・ガザ地区のWHO事務所長を務められたことがあり、国際保健、医療

理事長交代のいきさつ

2015年2月15日付で理事長が交代しました。新旧理事長よりご挨拶申し上げます。

退任のご挨拶／河上雅夫



この度、理事長を退任することになりました。在任中はCMN会員の皆様をはじめ、日本、ベラルーシの医療関係者の皆様、その他多くの方々にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。今後は理事の一人として、

引き続き活動にかかわってまいります。この間の大きな出来事としては、東日本大震災とそれに続く福島第一原発事故の発生です。原発の話題が多くの注目を集めるようになった割にはチェルノブイリ支援までなかなか関心が集まらなかったように思います。今後は、チェルノブイリの経験を生かした福島支援はどうあるべきか、会員の皆様とともに新しい支援の形を構築していきたいと思

います。今後とも皆様の支援をよろしく願い申し上げます。

着任のご挨拶／寺嶋悠



いつもチェルノブイリ被災地への尊いご支援に、心より深く感謝申し上げます。この度、新たに理事長を務めさせていただくこととなりました。ベラルーシでの被災者支援は、日本と現地の数え切れない方々の支援と尽力により、現地の医療システム全体の底上げにつながっています。しかし、検診体制の充実、医療機器の老朽化、新たな手術法の浸透、福島との連携など、同時代を生きる一人として共に向かい合うべき課題も生まれています。歳月が経ちましたが、チェルノブイリはまだ終わっていません。記憶の風化に粘り強く向き合い、現地の一次情報を発信しながら、これまでの成果を踏まえた新たな活動の伸展を目指し、理事スタッフ一同と力を尽くしていきたいと考えております。活動へのご意見、疑問など、ぜひお気軽にお寄せ下さい。草の根の市民活動がベースであり、常に市民の視点を忘れずに、会員の皆さまと共にある団体でありたいと考えています。どうぞこれまで以上に、一層のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

チェルノブイリ連続学習会を開催します！



下地図参照

第1回 「放射能とは」

日時： **7/11 (Sat) 18:30～20:30**

場所： **福岡NPO共同事務所「びおとーぷ」**

福岡市博多区博多駅前3-6-1 小森ビル4-A

講師： **河上雅夫** (CMN理事)

団体の結成から現在まで活動にかかわってきた大ベテラン。長年に亘って原発問題に取り組み、各地の活動にも詳しく、他では聞けない話も出てくると思います！

連絡先： **090-3765-8501** (河上)

今年6月28日、1990年にCMNの前身団体である「チェルノブイリ支援運動・九州」が結成されてから満25年を迎えます。チェルノブイリ原発事故からは来年で30年。私たち医療支援に関わるスタッフにも、支援をしていただいている会員さんにも、チェルノブイリ原発事故のことをあまり知らない世代が加わるようになってきました。また我々の医療支援は、現地で専門家が行う検診や甲状腺内視鏡手術であり、支援者の皆さんになかなかその実感が伝わりにくいものとなっています。

そこで、チェルノブイリ医療支援ネットワーク結成25周年記念事業として、放射線の基礎・原子力開発の歴史から始めて、チェルノブイリ原発事故の経過と被害について、また福島原発事故に関してでもできる限り詳しく解説する学習会を企画しました。一年間、連続12回の開催予定です。日時は原則として、毎月第2土曜日の18時30分～20時30分です。



第2回以降の学習会のテーマは以下を予定しています。来年以降については学習会の出席状況や参加者の意見を元に判断したいと思います。

② 8月8日

原発とは

-原子力開発の歴史、原発の基本構造-

③ 9月12日

チェルノブイリ原発事故について

-事故の経過から被害の状況まで-

④ 10月10日

CMNの結成から現在の支援まで

⑤ 11月14日

福島第一原発事故について

-事故の経過から甲状腺検査まで-

⑥ 12月12日

地震と原発

-原発を取り巻く問題点について考える-

第2回の会場は、「ココロセンター」・研修室(福岡市中央区舞鶴2-5-1 あいれふ8階)です。第3回以降の会場については現在調整中です。

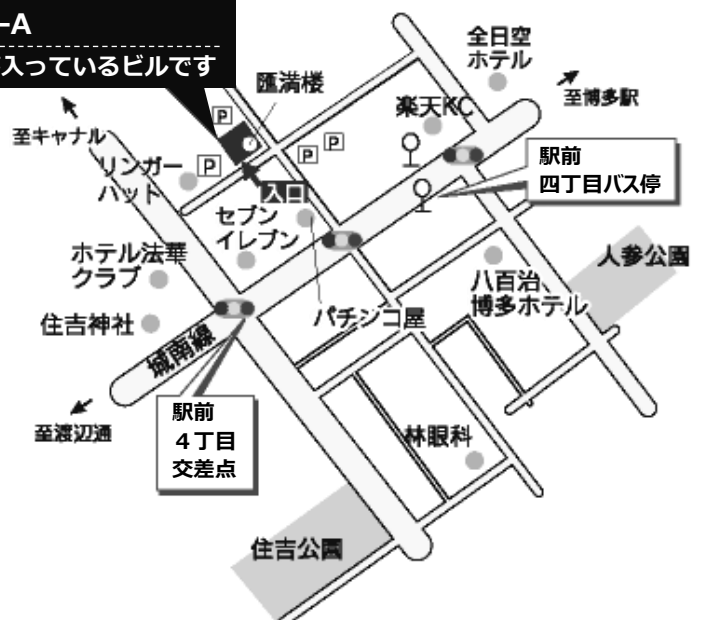


小森ビル4-A

1階に酒屋が入っているビルです

JR博多駅博多口より徒歩約10分

西鉄バス
駅前四丁目バス停より徒歩約1分



※各回のテーマはあくまで予定であり、都合により変更することがあります。



たくさんのご支援を本当にありがとうございます！
チェルノブイリ被災者支援のために大切にに使わせていただきます。

お名前掲載について

20 15年2月1日から4月30日までに募金をして下さった方、ならびに商品購入を通じて活動を支援して下さいました。同封の振込用紙の「氏名掲載」欄で、「可」の部分へ○印をして下さった方々をご紹介します。掲載を許可される方はぜひご記入をお願いします。なおコンビニやネットバンクからのお振込み等については、許可が確認できなかったものとして、掲載しておりません。募金者名の掲載をご希望の場合は、お手数ですが事務局までご連絡下さい。

マンスリーサポーター募集中！

月々 300円からの募金で気軽に、コツコツチェルノブイリ支援をはじめませんか？マンスリーサポーターになると毎月26日にご希望の金額がゆうちょ銀行総合口座から自動的にCMNへ寄付されます。

「毎回振り込みに行く手間を省きたい」「無理なく継続的に支援を続けたい」という方にピッタリです。お申込、お問合せは事務局までお気軽にどうぞ！

事務局からのお知らせとお願い

振込 用紙（ゆうちょ銀行またはコンビニ用）は毎号同封しています。これは「思い立った時にいつでも振り込みできるように、毎号同封してほしい」というご要望があったからです。決してお振込を強要するものではありません。恐れ入りますが、ご不用な方は処分をお願いいたします。

住所 を変更された方は、事務局までお知らせください。なお今後の資料送付が不要の場合は、お手数ですが事務局までその旨ご連絡ください。

(順不同・敬称略)

浅原望樹 榎本みつ枝 大木正人 大塚厚
音楽グループ「クリュティエ」・土門華奈子
梶原孝子 川崎巳代治 川崎幸子 古賀えみ
子 佐藤和子 渋谷けい子 関根敏子 高橋
武三 田中裕一 田中啓 遠山祥子 中村葉
月 野村文子 深堀ミチ子 (公財) 福岡Y
WCA 増田朋子 松井真知子 丸山さより
めぐみ保育園職員一同 本岡真利子 森悠子
和田政子

<2015年2月～4月分の寄付内訳>	
活動支援金	1,424,847円
のぞみ2 1カンパ	35,500円
雪だるま3号カンパ	29,500円
東日本支援カンパ	57,000円
合計	1,546,847円

★株式会社カタログハウスさまより、100万円の運営支援カンパをいただきました。心よりお礼申し上げます。

<都道府県別 / 計103名(匿名含む)>

【北海道】 1	【福島県】 1	【東京都】 11	【神奈川県】 1	【埼玉県】 1
【山梨県】 1	【富山県】 1	【静岡県】 1	【愛知県】 2	【三重県】 1
【兵庫県】 2	【鳥根県】 4	【岡山県】 1	【広島県】 6	【山口県】 4
【愛媛県】 1	【福岡県】 45	【佐賀県】 3	【長崎県】 1	【熊本県】 5
【大分県】 7	【宮崎県】 1	【鹿児島県】 2		

●マンスリーサポーターの皆さん / 計124名(匿名含む)

相羽美香子 磯道綾子 一瀬和美 伊藤利恵 稲田照子 井上礼子 植田清子 内野千鶴子
有働聡美 江原健一 延壽富美 大森卓子 大久保伸子 大久保弘子 大崎知恵 太田昌子
大場満 小黒慈子 落石久子 片山富美子 金山涼子 紙森優子 亀川早苗 河上雅夫 川崎
君子 川崎清美 川尻愛子 木村雅子 倉掛大輔 古賀輝洋 古賀尚子 後藤宇企子 財津悠
子 齊藤美代子 阪口香奈子 坂口馨子 櫻井美喜子 佐々野也依 佐竹早苗 佐藤一江 佐
藤進一 佐藤照子 白浜千恵子 末永浩子 首藤展子 高山知佐子 竹田恵子 武田孝子 田
中京子 珍部千鳥 土持秀男・由利子・朱加 網脇牧子 富永隆史 鳥井原桐子 鳥原良子
永江之子 永尾ゆかり 中島幸代 中島まゆみ 永野沙智子 西井えりな 西首延子 丹羽道
代 納富育代 廣松初美 深川哲臣 福井初子 福本勅子 藤田優子 藤本竜子 藤本孝子
淵田三輝 古川恵子 松井真知子 松尾智恵子 松木幸美 松永庸子 丸山さより 水本敬子
三野桂子 宮野義治 村田聡子 村西美由紀 村松知子 室屋芳乃 山下澄子 山中陽子 山
本亮輔 吉田美抄子 渡邊久美子 渡邊真志子

http://www.che-9.to/dekinu2.html#month

●皆さまからのメッセージ (一部抜粋)

●いつもわずかですが、皆様の活動のほんのひとしずくにでもお役に立てますように…。ありがとうございます。●3.11から4年。いよいよ国内での健康被害も顕在化してくる頃です。心配しています。●一日も早く皆が安心して暮らせるようになりますように。●「空の村号」という飯館村の酪農家の家族の舞台劇に取り組みました。大変感動しました。●カレンダーありがとうございます。●福島県健康調査での甲状腺異常の増加を単なるスクリーニング効果によるものとか、放射線の影響とは考えにくいと断じてよいのかどうか疑問を持っています。ベラルーシなどの実態もふまえ、今後も検査を続けて見守ってほしいですね。●ポリシーを持って活動して下さるネットワークの皆さんに感謝しております!!●世界はつながっています。人はもちろん、生物も仲間です。寄り添っていききたいものです。

編集後記 発行100号を記念して、紙面デザインをリニューアルしました。これまで縦書きだったものが横書きに変わったので、「読みづらい」と感じる方がいらっしやたらすみません。特集のリュウダさん体験記は、原発事故被災者の一人として経験された苦しみがいひしひと伝わってきます。でも、そこから未来へ向けての確かな一歩を踏み出したリュウダさんに改めて尊敬の念を感じました。(み)

